

令和4年度 学校関係者評価報告書

評価点

自己評価		学校関係者評価	
A	高いレベルで達成できた	A	とても適切である
B	達成できた	B	概ね適切である
C	一部達成できなかった	C	あまり適切でない
D	ほとんど達成できなかった	D	適切でない
		E	判定できない

学校(園)名: 広島大学附属東雲小学校

分野	重点目標 (評価項目)	年度計画(中期計画・ 中期目標)との関連性	具体的方策	成果指標・判断基準	自己評価		学校関係者評価		学校関係者評価を 踏まえた改善策
					達成状況, 改善策	評価	意見・理由	評価	
教育課程・ 学習指導等	チーム東雲を実感しつ つ教員が愛校心をもつ て教育活動に取り組む	異なる学級形態を有す る本校の特長を生かし つつ, 教員が一つの チームとして機能し, 教育実践の質的向上 を図る	・低中高別の目標と具 体的な取組の共有 ・年間4回の児童の成 長や変容の共有 ・5回の集会を通しての 保護者への啓発	・教員アンケートでの肯 定的評価85%以上 ・児童の記述をもとにし た一人一人の成長に 関しての具体把握10 0%	83% (20/24名)の教員が教育 活動に対して肯定的な評 価をしている。また23/24名 の教員が児童の成長の姿を 具体的に語るができること としている。担任外でもそれぞ れの立場から関わる児童に ついて成長を見取るよう働き かけたい。	C	日常的な教員間の交流をこれ からも大切にしてほしい。違う目 で捉えらる多面的な捉えがで きるようになり, 改めて児童の良 さに気付くことにもつながる。足 りない・問題がある所ばかりに目 が向くとその点ばかりに意識が 傾き, 全体を把握できない危険 がある。	B	児童の良さに目を向け, 担任 どうし, 担任と専科教員の日 常的・自然発生的な交流をよ り活発にし, 情報交換・情報 共有に努めたい。そうするこ とでチーム東雲の組織風土 をつくりたい。
	学級の枠を越えた児 童どうしの関係の構築 する		・縦割り活動を基軸に した日常的な活動の設 定 ・会議等での児童の様 子についての教員間 交流 ・自分から気持ちのよ い挨拶の指導	・縦割り班でのかかわり に関する児童自身の 肯定的な評価70%以 上 ・挨拶に関するアン ケートでの肯定的な評 価70%以上	縦割り班での活動が少しず つ元に戻り, 約80%の児童と 90%の教員が良い関わりがも てたと回答している。挨拶 に関しては約75%がで きていると回答している。「自 分から」の挨拶をさらに強化 していきたい。	A	上学年と下学年が関わり合い, 声をかけ合うことができるよう になったことが良い。日常的な関 わりの中で見えた児童の良さを 教員間が共有する, そのことに とても価値があることを教員に 伝えてほしい。	A	異学年の交流が行われる日 常的縦割り活動はもちろん, 運動会の応援づくりや登校 班の集会等で児童どうしが関 わり合う場をより強化してい く。活動後の教員の価値付け を具体的にやっていく。
教育研究等	教科等本来の魅力に 迫るための教員の資 質・能力に関する研究 を推進する	附属学校としてのミッ ションを踏まえ, 大学 教員と連携・協力した 教育研究活動等を推 進していく	・年間8回の小中合同 の研究推進の計画的 な運営 ・教員どうしの能動的な 授業研への参加	・研究授業や研修会年 10回以上の実施による 研究テーマの追求 ・必要な教員の資質能 力を具体的に明らかに した研究紀要の発刊	低中高学年別・複式・特別支 援・小中・教室環境等の研究 授業や研修を年間15回実施 できた。教員の資質能力に 焦点をあてた実践を研究紀 要にまとめることができた。	A	附属学校の使命である教育研究 は重要になることは言うま でもない。単式・複式・特別支援と 異なる学級形態をもつ小学校 の特長を生かして研究的に授 業実践を積み重ねてほしい。	A	インクルーシブ・複式教育・ 特別支援教育等, 明確な目 的をもって協議を深め, 自分 の実践に生かせるような研修 にしていく。
	複式教育・授業づく りに関する研究を推 進し, その成果を発信 する		・全体での理論研修と 低中高別の授業協議 会の実施 ・原稿作成につながる 複式授業協議の柱の 設定	・複式教育授業座談会 での参会者の満足度8 0%以上 ・「複式教育ハンドブ ック」の原稿の完成	複式教育授業座談会をオン ラインで実施し, 事後アン ケート参会者全員が参考 になったと回答している。ハンド ブックの原稿もほぼ完成して いる。	B	複式教育・複式学級の学習指 導については, ニーズも高いと 聞いている。先進的に取組をし て引き続き積極的な発信をし てほしい。	B	引き続き複式ハンドブック発 刊に向けて, 複式教育に対 する本校の基本的な考え方 や授業づくりの具体的な方策 をまとめていく。
社会連 携・社 会貢 献等	県内の公立学校との連 携を図り, 大学や他団 体からの要請に協力 する	小中連携や多様な学 級形態を有する本校 の特長を最大限生か し, 地域の教育力の向 上に貢献できるように 努める	・講師派遣や視察・調 査受け入れ ・外部研修への能動的 な参加 ・職員会議での研修で 学んだことの共有化	・年間5回以上の研修 報告の実施により本校 への新たな研究示唆 の獲得 ・大学との共同研究や 学校視察, アクションリ サーチ実地研究, 調査 協力等の実績昨年度 以上	共同研究1→2件, 学校視察 1→2件, AR実地研修5→8 名, 調査協力4→6件と昨年 度以上の実績になった。オン ラインや他附属の研究会参 加(20件以上)等, 積極的に 自己研鑽に励むことがで きた。来年度は情報共有の方 法を検討していきたい。	A	学習の成果物を展示して地域 の人に見てもらおう仁保公民館と の交流はとても素晴らしい取組 である。仮に地域に迷惑をかけ ることがあったとしても「知っ ている間柄」だから注意しようとい う気持ちになる。地域の人に 守ってもらえる関係づくりを築い ていけるように地域との交流を 深めてほしい。	A	授業協議や実践交流の場を 通して他の附属学校に限ら ず公立小学校との関わりも強 化していく。また, 大学との共 同研究, 視察や調査協力の 受け入れ等を積極的に行 い, 会議での報告の場を利用 して共有する。

注) 太枠内は, 学校関係者評価委員会が記入する。

令和4年度 学校関係者評価報告書

評価点

自己評価		学校関係者評価	
A	高いレベルで達成できた	A	とても適切である
B	達成できた	B	概ね適切である
C	一部達成できなかった	C	あまり適切でない
D	ほとんど達成できなかった	D	適切でない
		E	判定できない

学校(園)名: 広島大学附属東雲小学校

分野	重点目標 (評価項目)	年度計画(中期計画・ 中期目標)との関連性	具体的方策	成果指標・判断基準	自己評価		学校関係者評価		学校関係者評価を 踏まえた改善策
					達成状況, 改善策	評価	意見・理由	評価	
学校経営・安全管理等	安全な学校生活にするための教育環境を整備する	学校教育の基盤となる健康、安全、安心の確保及び附属学校としての使命の遂行の観点から教員配置の適正化を図り、業務内容を整理する	・コロナ対策と行事や教育活動等の両立を図るための丁寧な検討 ・月1回の安全点検による修繕等希望箇所の把握と迅速な対応	・学校行事や教育活動等を実施し、楽しく充実した学校生活に満足している児童80%以上 ・修繕等希望箇所への対応100%	学校行事は工夫して全て実施できた。児童の満足度も80%を越えたが、以前の行事と比べて物足りなさを感じる児童も少数いた。大きな修繕は残ったが、可能なものは迅速に対応できた。	B	コロナウイルスの感染が落ち着き、本年度の取組を聞いて学校にエネルギーが戻ってきたと感じる。東雲の良さである「行事で子供を育てる」取組をこれからも大切にしてほしい。	B	各学年の発達段階や役割に応じて、行事やそれぞれの活動におけるめざす像を具体的に示し、見取り、評価する一連の取組を通して子供の成長を促していく。その成長を児童と喜び合う瞬間を大切にす。
	ICTの環境を整備し、効果的な活用を模索する		・タブレットの環境整備や活用に関して教員への聞き取り ・効果的な活用例の情報収集と交流	・タブレットが使用できる環境に満足している教員80%以上 ・タブレットを使用した実践例の増加	約30%(7/24名)の教員がタブレットを積極的に使用することができた回答。30%の教員が積極的に使用できていないと回答していることからアプリをさらに充実させ、情報交換・情報共有を図る必要がある。	C	教員の個人差が問題になっているが、ICTの活用は教員の資質能力としても必要となるものである。教員の研修の場を設けるなど粘り強く働きかけてもらいたい。まずは手に取ることから始めて使ってみることが第一歩となるだろう。	C	校務分掌として新たに部を立ち上げ、機器の使用に適した環境づくり、効果的な活用方法の共有化を図る。まず教員自身がタブレットを日常的に使用することにより必要な技能を楽しみながら獲得できるようにする。
	教員自身が自らの働き方を意識し、健康管理に努める		・月1回の会議なしDayの実施 ・議題と時間明示による見通しのある会議運営 ・自分の働き方の工夫に関する個人業績シートへの記述	・組織目標である5%勤務時間削減達成教員80%以上 ・本校の教育活動にやりがいを感じている教員80%以上	5%削減達成の教員が60%(13/21名)。全体としては年間総労働時間が昨年度より11%削減できた。やりがいを感じている教員が95%。削減できていないのは研究部教員、6年担任。仕事内容の見直しや自分の時間の確保等の観点で検討していきたい。	B	教員が健康的で元気に働くことが大切である。個業になると勤務時間は増える傾向がある。一方で協力関係が築けても仲良くなり、勤務時間が延びたという報告もある。この仕事は何時までと区切りをつけてメリハリを付けて働く意識を教員がそれぞれもつことが肝要である。	B	組織目標の5%削減が達成できなかった教員には、仕事間の区切りを意識したメリハリを付けた働き方を意識することで達成に向かわせたい。結果として令和3年度の勤務状況との比較において70%の教員の削減達成をめざす。
教育実習	主体的に学ぶ、チームで学ぶ教育実習指導を実現する	次世代型の教育実習指導を開発する	・毎日の学級反省会の自主的な運営と協議 ・教科横断の授業提案を含めた学級代表授業の取組 ・継続的な情報収集と協議による児童理解の深化	・教員と学生へのアンケートによる実習に臨む主体性に関する肯定的評価80%以上 ・チームとして協力し合える実習生どうしの関係に関する肯定的評価80%以上	実習全般について学生全員がとても満足81%・満足19%と回答している。教員の捉えでは学生が主体的に・協力し合う実習になったと全員が評価する結果となった。	A	将来、教職を希望しない学生が実習生にいても長い目で捉えるようにしたい。教育・教職に対する関心がいつ芽生えるかは分からない。裾野を広げるつもりで取り組んでもらいたい。	A	実習生が主体的に、協働的に進める教育実習の実現に取り組んでいく。また、教科横断の授業提案や子供の実態に応じた学級経営案の作成等、現代的な課題も取り入れ、やりがいの感じる実習にしていきたい。

注)  太枠内は、学校関係者評価委員会が記入する。